Junko Higasa

寒月君の球磨き

『吾輩は猫である』第五章で、寒月君の研究が原子力に関わっていることはわかった。そして当時の社会ではそれが日本の軍事力につながる研究であることも。

実際、この作品のモデル・寺田寅彦の先輩にあたる長岡半太郎は、帝国大学で原子構造の研究に取り組んでおり、もし日本が世界的な国家であったなら、彼が原子力研究へ真っ先に成果を挙げていたかもしれない状況であったという。日本はいまだに研究者や芸術家を育て上げる社会土壌がなく、優秀な頭脳は海外へ流出し、それを認めた諸外国から逆輸入されることが多く、国内研究者の世界進出は厳しい状況にある。

さて、寒月君の研究は、日露戦争時下において、優秀な武器を作るために利用された技術である。そのため寒月君がいつまでも研究の成果を挙げないのは、漱石の戦争反対の思いが込められていると取れる。しかし私はここでもう一つ、漱石が心に抱いていた「東洋の思想」という視点から寒月君の研究を見てみたい。

寒月君の磨くものは球体である。私はこれを明治の社会・明治の精神と捉える。天皇を頂点に完全に見える（完全というものは世の中にない)球体として存在したのが明治の社会であったように思う。人は疑うことなく国家を敬い従った。その球体から放たれる光は国民全体が同じ方向へ向かう真っ直ぐな光であった。つまり国家はバランスのとれた球体であった。誰疑うことなく家督・商売は継承され、世の中の仕組みは継続的に流れていった。ところが日露戦争の勝利と共に西洋の文明が日本に普及すると、まず戦争で儲けた人から社会的権利の拡大が始まり、そこからあらんかぎりの権利を手に入れようとする競争が起こった。国民は少しでも有利な権利を手に入れようと、我先にと狭い碁盤の目のような競争枠に飛び込み、そこから個人としての自由を勝ち取ろうとした。世の中はもはや国家の権力下ではなく、止まることなく個人主義台頭の時代へと突き進んでいく。漱石はこの個人主義が発展していくと、国民としての義務以上に個人の権利を主張する社会になっていくだろうと予測した。義務を果たさずに権利だけを主張すれば社会は歪む。寒月君の球が磨けば磨くほど歪んでいくのは、西洋の模倣による急激な文明の発達によって、今まで丸かった社会が個人の主張でどんどん歪んでいくことを表しているように思う。磨けば磨くほど―即ち国内に土台のない西洋文明の表層模倣に走るほど、東洋文明の美点は失われて社会はいびつになる。いびつな球体からは真っ直ぐな光は出ない。屈折した光が出るばかりである。つまり日本人の美しい真っ直ぐな光―日本で培われた美意識は失われる結果となる。

それまで日本人が持っていた「真っ直ぐな光」とは明治の精神である。日本人の精神の美徳は何であったか。また人間として何が尊いか。人々は近代化を急ぐあまり西洋文明を無防備に称賛し、時代の流れに遅れまいと潮流的精神病を患い、浮き草のように漂っているのではないか？それはオフィーリアを彷彿させる。競争社会になる前はいじめによる社会的排斥が横行することはなかった。人は自らの行いに責任を持ち、その果たし方を知っていた。球がどんどん歪んでいくのは、文明開化に伴う個人主義の研磨が止まることなく進んでいくことを表す。そこから発せられる屈折した光が人間の正しい精神性を崩壊させるという警告を心して受け止めるべきだろう。(2012.4.4)